特集

覚せい剤は、絶対にダメ!!

取り組み

行政、保護者、学校、地域が一体となり薬物を排除へ

去る3月の市議会において、「青少年の覚醒剤等の薬物乱用防止に関する決議」が議員提出議案として提出され、可決されたところです。これは、覚せい剤などの薬物により青少年がむしばまれていく事態を重視し、有害薬物に対する認識を高めることや乱用防止などの啓発活動を行政、保護者、教育関係者、地域が一体となり積極的に推進し、正しい知識やその恐ろしさを青少年に周知徹底させ、薬物乱用の根絶を目指すものです。

市では、「青少年を育てる狭山市民会議」を構成する団体と協力し、現在の覚せい剤乱用の状況と対策について市民のかたがたに理解していただくため、駅前などでのキャンペーンや講演会（市内８地区）など薬物排除に対する啓発活動を行っています。

また、埼玉県教育委員会では、低年齢化し急速な広がりをみせる薬物乱用を重点課題としており、それを受け、市教育委員会では教師の研修会などへの参加や生徒、保護者への啓発活動を行っています。

市の取り組み

□青少年健全育成団体などとの連携による薬物乱用防止の取り組み▼７月１日…市内４駅でリーフレット４千枚と花の種を配付▼６月25日～７月15日…市内８地区で青少年健全育成講演会「青少年の覚せい剤等の薬物乱用の現状と対策について」を開催

学校の取り組み

□各教科、領域を通じて、薬物乱用防止に関わる教育の実施

□卒業期の中学３年生や学年集会などを活用し、薬物乱用防止に関する講演会や集中指導の実施

□県関係機関、教育センターなどでの教職員を対象とした研修会、講演会への参加

□保健主事、養護教諭などの専門的知識を有する指導者を中心とした校内研修の実施

□保護者会、ＰＴＡ活動を通じ、講演会への参加や研修会の実施など啓発活動を推進

●薬物乱用は社会全体の問題

今回、市内で子どもたちに覚せい剤についてのアンケートを取りました。彼らは、覚せい剤は手を出してはいけないものという意識はありますが、その反面、一度だけやってみてもいいかなという興味本位の面ものぞかせました。子どもたちのまわりにはいろいろな誘惑がたくさんあります。心身の成長期にある彼らは、その誘惑に負けてしまいかねません。そうならないためにも、彼らに正しい知識と自覚と誘惑に負けない強い意思を持つようにしていかなければならないのです。同時に私たち一人ひとりが正しい知識をもち、彼らに対応できなければなりません。検挙された少年少女の保護者の多数が、子どもが覚せい剤を使用していることを知っていた、または、薄々は知っていたにもかかわらず、注意することさえもできずに、乱用を黙認、黙視していたそうです。このような状況では、何の解決にもならず、さらに乱用を続けさせるだけです。薬物の乱用は、私たちの生活に『害』しかもたらしません。

覚せい剤の乱用は自分の体をむしばむだけでなく、幻覚症状や禁断症状からおこる犯罪など社会全体をもむしばんでいく結果につながって行きます。覚せい剤など薬物乱用の問題は、一人ひとりの問題だけでなく、社会全体の問題なのです。

問い合わせ 市民生活課青少年係 内線２２９

●平成８年の覚せい剤に関わる事件・事故（全国）

放火未遂（神奈川県・１月）

造園業の男（39歳）は、覚せい剤の幻覚から自分の家に灯油をまいて放火したが、家人が消し止めたため未遂に終わり逮捕された。

傷害（兵庫県・７月）

元暴力団幹部の男（27歳）は、覚せい剤を乱用し、入院中の内妻と長男（７か月）に対し、覚せい剤入りのプリンを食べさせ覚せい剤中毒の傷害を与え逮捕された。

殺人未遂（山口県・10月）

鉄筋工の男（38歳）は、覚せい剤の幻覚から、同じ住宅に住む男性が自分の悪口を言っていると邪推し、刃物でこの男性を数回突き刺して重傷を与え殺人未遂で逮捕された。

事故・負傷（埼玉県・４月）

無職の男（40歳）は、覚せい剤の幻覚から隣家の２階屋根に登り「死にたい」と叫んで飛び降りて負傷した。

事故・死亡（福岡県・６月）

土木会社社長の男（35歳）は、妻と一緒にホテルで覚せい剤を使用して休憩中、急に容体が悪くなり、救急車で病院に収容されたが覚せい剤中毒により死亡した。

乱用者の母親の手記から（実例）

けいさつのまど No.115 特集号DRUG（警察庁）より

娘を廃人にした覚せい剤

●主婦（43歳）

高校卒業を目前にした娘が、ある日突然、「学校をやめて働こうかな。」と、ぽつりと漏らしたことがあるのです。酒乱だった夫と離婚し、女手ひとつでようやくここまで育てあげてきた娘が、私に危険信号を送ってきたのですが、その危険信号を私は見落としてしまったのです。

娘が相談してきた時に、私は、「あと半年ぐらいで卒業なのに、何を変なことを言っているの。」と一蹴してしまったのです。そのときに、親身になって相談にのってあげていれば、こんな結果にならなくても済んだのではないかと思うと、悔やんでも悔やんでも悔やみ切れないのです。当時の娘の生活態度から、不良仲間と付き合っていたことは薄々知っていました。事件は、そんなことがあった日から3か月くらい経ったある日のことでした。

警察から「娘さんが覚せい剤事件で警察に捕まりました。」との連絡を受け、私は、事の重大さに打ちひしがれました。結局、その時は、娘は、友だちから覚せい剤を注射してもらっていたということで刑務所には行かずに済み、二度と覚せい剤には手を出さないという約束をしてくれたものの、そのころにはもう覚せい剤中毒者となっていたのです。娘が「学校をやめて働こうかな。」と漏らしたのは危険信号を送っていたもので、この時に、娘は不良仲間や覚せい剤から手を切りたかったのに違いありません。それを察知できず、娘を覚せい剤中毒者にしてしまったことには私にも責任があるのです。

その後の娘の行動については、私も夜の仕事をやめてよく見ていたつもりです。そして、娘も気分転換に家の近くにあるコンビニ店で、アルバイトをしたりして、すっかり元どおりになったように見えました。ところがいつの頃からか、また以前の不良仲間と付き合うようになり、しばらくすると、ご飯を食べるときに、ご飯に立つ湯気を見て「ご飯の上に虫がいっぱいいるよ。」とか、カーペットについた髪の毛などを見つけては「虫がいっぱいいるよ。」と一本一本丁寧に拾い集めたり、深夜に鼻歌を歌いながら洗濯を始めたりしだしたのです。

そんな様子から、また、覚せい剤を注射し始めたのではないかと思い、警察に相談に行こうと心配していた矢先に、警察から「ホテルの3階から娘さんが飛び降り、病院に搬送されました。」との電話が入ったのです。娘は、暴力団組員とホテルへ行き、大量の覚せい剤を注射されて発作的に、裸のまま、ホテルの窓から飛び降りたとのことでした。

娘は、そのときの覚せい剤のショックと後遺症から廃人同様となり、現在はいつ退院できるか分からないまま精神病院に入院中です。一時は娘を連れて自殺まで考えましたが、屈託のない娘の笑顔を見ていると不憫でどうしても死に切れませんでした。これからは、親の責任として、娘の回復を夢みながら頑張っていくつもりです。

●薬物乱用についての相談・問い合わせ

もし、自分たちや家族だけで解決できないときは、警察、保健所、覚せい剤相談窓口などに相談してください。

▼狭山警察署生活安全課☎53－0110▼狭山保健所☎54－6212▼県薬務課☎048－824－2111内線3633▼ホワイトテレホンコーナー（覚せい剤）☎048－822－4970▼埼玉県暴力追放・薬物乱用防止センター☎048－834－2140▼麻薬・覚せい剤相談電話☎03－3791－3779